慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「反本質主義」という語り方 : その特徴,限界,可能性
Sub Title	On anti-essentialists : their features, limits, and potentialities
Author	椋尾, 麻子(Mukuo, Asako)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2004
Jtitle	哲學 No.112 (2004. 3) ,p.165- 186
JaLC DOI	
Abstract	This essay is a study of the "anti-essentialist" approaches as the methodology in the realm of sociology and human sciences, which have become prevalent for recent years. Here, I would like to examine the following three types of "anti-essentialism": 1) the social constructionism which has been developed mainly in a sociology of social problems; 2) the post-structuralism such as the feminism, cultural studies and post-colonial studies; and 3) Richard Rorty's Neo pragmatism. They all have a great deal of studies evolved under the impact of so-called the linguistic turn. It appears, however, they sometimes come into conflicts as their targets and goals are not common to but different from each other. My primary concern is to review comparative studies of these approaches extensively, and thus to explore the potentialities and/or limitations of the "anti-essentialism" in a sociological perspective. Talking about the narratives of the "anti-essentialist" theory, special attention is given to the positionality of the speaker-including analyst/researcher. In this context, it may be recognized as a new method in sociological research distinct from preceding approaches and dislocating them. Such a stance, I presume, rather signifies the thoroughness in theoretical setting of sociological issues.
Notes	特集家族とその社会的生活世界の探求 研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000112-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

「反本質主義」という語り方

——その特徴，限界，可能性——

椋　尾　麻　子*

On Anti-Essentialists: their features, limits, and potentialities

Asako MUKUO

This essay is a study of the "*anti-essentialist*" approaches as the methodology in the realm of sociology and human sciences, which have become prevalent for recent years. Here, I would like to examine the following three types of "anti-essentialism": 1) *the social constructionism* which has been developed mainly in a sociology of social problems; 2) *the post-structuralism* such as the feminism, cultural studies and post-colonial studies; and 3) Richard Rorty's *Neo pragmatism.* They all have a great deal of studies evolved under the impact of so-called *the linguistic turn.* It appears, however, they sometimes come into conflicts as their targets and goals are not common to but different from each other.

My primary concern is to review comparative studies of these approaches extensively, and thus to explore the potentialities and/or limitations of the "anti-essentialism" in a sociological perspective.

Talking about the narratives of the "anti-essentialist" theory, special attention is given to the *positionality* of the speaker—including analyst/researcher. In this context, it may be recognized as a new method in sociological research distinct from preceding approaches and dislocating them. Such a stance, I presume, rather signifies the thoroughness in theoretical setting of sociological issues.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程

はじめに

特定の学問的領域やイシュー，たとえば「社会学」という範疇のなかで，同じことばが全く異なる文脈において用いられ，複数の言説の間で齟齬をきたしていることがしばしばある．一見，使われていることばが同じなために，筋が通っているように思われるが，実のところその概念の意図するところが精査されることがあまりないがために，議論が噛み合っていないのではないか，と気づく[1]．つまり，あえて強くいうならば，とってしかるべき手続きをとらないために無為な論争が展開されていることもままあるように思われるのだ．何かを語る/記述することとはそれ自体，常に誤読，誤解の可能性を含んでいるものだろう．その「誤読」は，意図的であれ無意識的であれ，ときに理論/思想の新たな可能性を生み出しうることもまた確かである．だが他方で，そうした誤読の連鎖による議論の擦れ違い，食い違いを解きほぐす作業もまた必要なのではないだろうか．

「構築 construction」「反本質主義 anti-essentialism」といった概念も，そうしたマジック・ワードのうちに数えられよう．昨今氾濫する「反本質主義」「構築」ということばの間にみられる擦れ違いについて，私はかねがね違和感を覚えてきた．これまで特定の実体としてとらえられてきた物事が社会的に「構築」されたものである，という考え方（ひいては「反本質主義」的態度）は，今日の人文/社会科学の姿勢，あるいは記述の方法として，すでに広く浸透，定着している．けれども，管見では，このタームの相互了解が不十分であるがゆえに，理論的な対話の隘路があるように思われてならない．本稿は，こうした違和感を解消すべく，「反本質主義」なるもの/ことばの腑分けと摺り合わせを行なおうとする試みである．

そもそも，「反本質主義」の隆盛の契機の一つには，20 世紀の大きな思想的転換である「言語論的転回 linguistic turn」があげられる．ウィー

ン学団に始まり，R. ローティの編纂した同名の論集 (Rorty ed. 1967) によって広く知られるようになったこの思潮は，ポストモダニズム，ポスト構造主義などの諸理論と関連しあいながら，従来の人文・社会科学のパラダイム・シフトに多大な影響力をもたらした．言語論的転回とは，普遍的，恒久的な「真理」「本質」を追究する試みから「言語」に焦点を当てた研究への転換を意味する．つまり，所与の「本質」「真理」なるものの存在可能性は括弧に括り，それらと言語との関係，つまりそれらがいかにして語られるのかが注視されるようになったのである．かくして，言語以前にあると想定されていた「本質」「真理」に対しての疑義から，「反本質主義」が要請されることとなる．逆にみれば，そうした反本質主義的志向こそが，言語論的転回を推進してきたともいえよう．

「反 anti」とある以上，各々の「反本質主義」には敵あるいは対立項が存在する．文字通り，「本質主義」に対する抵抗である，と総じて結論してしまえばいいかといえば，それは単純にすぎるだろう．なぜなら，その「本質主義」自体，単独では論じえず，「反本質主義」からの逆照射つまりは批判によってしか了解しえないからである．長原豊は，「本質という哲学（史）の核心的主題が，いまや本質主義と反本質主義との分岐として遡及的に整序される歴程においてのみ理解されるほかない」（長原 2000: 108　傍点は長原による）とし，「反本質主義」を以下のように論じている．

> とすれば，反本質主義は，本質の非-在を根拠とする本質主義の否定ではありえない．反本質主義とは，本質が無(な)いという立場ではなく，むしろ〈本質が在(あ)る〉という本質への信認という不可避の病気に対する救済-治療という倫理-政治的立場である．（長原 2000: 108　傍点は長原）

かくして，それぞれの「反本質主義」が想定する敵と目的は何であるのか，が重要であると確認される．何が「本質」として「信認」されている

とみなすのか，そうすることで何を目指しているのかが，多様な「反本質主義」を峻別するいわばマーカーなのであり，このマーカーを用いて諸言説を位置づけることが本論文における作業となる．

「反本質主義」は，いうまでもなく，（後にとりあげる）社会構築主義の特徴の一つであり，社会学の領域でこれまでにも多くの言及があろう．本稿においても「構築主義」と「反本質主義」を一部互換的に用いることとなる．だが，この論考においては，あえて「反本質主義」とは何かを問い直すことで，これまでのいわゆる社会学的な議論からは外されてしまいかねないようなものもとりこむ形で論考してみたい．

ここからは，「反本質主義」を以下の三つに大別して論じていく．第一に，社会問題の社会学などでみられる「社会構築主義」アプローチである．第二に，カルチュラル・スタディーズやジェンダー/セクシュアリティ論およびポストコロニアル研究にみられる，「ポスト構造主義」的なアプローチ[2]である．そして第三に，先述の第二の潮流を「文化左翼 the cultural left」と批判するローティの所論「ネオ・プラグマティズム」をとりあげる．ただし，これら三者は，各々が完全に独立した研究視角というよりは，「反本質主義」なるもののもとに緩やかに連繋している言説群だといえよう．

本稿でとりあげる三つのアプローチのうち，後者二つは，「社会学」における構築主義の議論においては，あまり俎上に上ることがなかった，あるいは中心的なものとは必ずしも見なされてこなかったと思われる．ポスト構造主義的な潮流についていえば，たとえばJ. バトラーの議論（Butler 1990; 1997 など）は確かに大きく取り上げられ，構築主義の進展に大きく関与しているだろう．だが，カルチュラル・スタディーズや，ポストコロニアル・スタディーズの知見は，少なくとも日本における社会構築主義の流れのなかには，さほどくみいれられてはいないように見受けられる．あるいは，フェミニズムやナショナリズムといった特定の領域に

限定的に受容されたり，いわゆる「社会学」とは別のものと見られたりするきらいがあるのかもしれない．ローティのネオ・プラグマティズムに関しても，もっぱら（政治-)哲学的理論として，リベラリズム論と関わるような一部の例外を除き，これまでの社会学では看過されてきた向きがあるのではないだろうか．そうした単純な棲み分けをするよりは，「反本質主義」という共通項を手がかりに，それらを相互参照しつつ論考を重ねていく方が生産的に違いない，というのが本稿の立場である．

それでは，それぞれについて概観してみたい．

社会構築主義（社会問題の構築主義的アプローチ）

社会構築主義は，いうまでもなく，近年の社会学においてとみに注目されているアプローチのひとつである．1960年代以降の合州国で盛んであったレイベリング理論から派生して展開された．S. ウールガーとD. ポーラッチによる，OG問題こと，存在論上の境界の恣意的設定 Ontological Gerrymandering 批判 (Woolger and Pawluch 1985＝2000) を中心とした，いわゆる構築主義論争を経て，日本でも，すでにその紹介だけにとどまらず，その反省および再考がなされつつある．また，平と中河がその編訳書の序文でいうように，構築主義を広く捉えれば，非常に多岐にわたる領域に研究を見出すことができる[3]（平・中河編 2000: 13-4).

だが，本節では，今日の社会構築主義の先鞭をつけた，M. B. スペクターとJ. I. キツセによる『社会問題の構築』(Spector and Kitsuse 1977＝1990) に立ちかえり，これを中心に検討する．同書は，言語論的転回をうけてレイベリング理論を再構成したとみなしうるものである．ここでは，著者たちの当初の狙いを確認することで，構築主義の「反本質主義」的特徴を描いてみたい．

周知のとおり，スペクターとキツセは同書において，社会問題を特定の「実態」として客観視しようとする従来の社会問題研究の手法をとらず，

人々が状況を社会問題だと定義する営為，すなわちクレイム申し立て活動に着目するという，新たなアプローチを構想した．彼らは自らの方法論を「社会問題の機能理論への反論であると同時に，価値葛藤学派の諸研究を発展させ，それを精緻化したものでもある」と規定している (Spector and Kitsuse 1977＝1990: 115).

その際，社会問題として「想定された状態」が実在するか否かについては「関知しない」という方策を彼らはとる (Spector and Kitsuse 1977＝1990: 120).

> [……] 社会問題の社会学の研究者が，ある状態についての申し立ての客観的根拠の問題に全く無関心とさえいえるほど，注意を払わずにいるべきだというのは，それほど極端な主張ではない．この主張は，われわれが客観的状態の実在を認めないということを意味するわけでもないし，社会学者も他のいかなる科学者も，客観的状態についての証拠の提示や，その状態の原因の究明をすべきではないということを意味するわけでもない．そこに存在すると想定された種々の状態についての，事実的根拠はどうであってもよい．クレイム申し立て活動とそれに応える活動自体が，社会問題の社会学の研究対象なのである．このような活動は実在しており，社会学的な視点からその存在を立証し，その内実を分析することができる．(Spector and Kitsuse 1977＝1990: 122-3)

というのも，「客観的な」社会問題およびその根拠の分析は，実際には社会学者自身の価値判断を免れえないからである．ゆえに，キツセらは状態の実在や本質について保留し，社会のメンバーのクレイムをめぐる相互作用過程の分析に専念することを提唱するのである．

かくて，スペクターとキツセは，機能や価値，規範に基づいて社会問題を同定する，従来の実証主義的社会学に対して挑戦した．スペクターとキツセのこのような試みは，経験的研究において不徹底である，貫徹しえない，として，後にいわゆるOG問題が噴出するわけだが，本稿ではその詳細まで触れない．ただし，定義的アプローチを維持することの困難につい

ては，おそらく著者たち自身も認識していなかったわけではない．

キツセとスペクターは同書のなかで，逸脱と社会問題についての定義的アプローチを貫徹することの困難を，「社会学者の3種類のメンバーシップ」との関連から推論している（1977＝1990: 第4章）．すなわち，①社会のふつうのメンバーとしての社会学者という側面においては，当該社会のメンバーとしての自らの解釈活動に対して検討を怠ることになる，②専門家グループのメンバーとしての社会学者としては，大学や学界の組織環境下で既得権益を守るべく伝統的なアリーナでの競争を迫られる，そして③社会問題の参加者としての社会学者は，個別の専門家として，実務的な政策に関わる問いへの回答を期待され，その問いの背後にある実証主義的な諸仮定を受け入れてしまうという，社会学者の三つの側面とその（不幸な）帰結，すなわち理論家の関心が定義活動への参加自体にそらされてしまう可能性を述べている．実のところ，キツセとスペクター自身が，この三側面からどのように自己定義しているのか，あまりはっきりとは記されていない．だが，少なくとも可能であれば「超然とした非関与の態度を保つ」(Spector and Kitsuse 1977＝1990: 110) のが望ましい社会学者のあり方であると考えていたようには覗われる．しかし著者たちはその第5章において，クレイム申し立て活動を専門家である社会学者の研究対象と設定する一方で，クレイムというカテゴリーを常識の一部だとも述べている．そうした「研究者とメンバーという二重視点の想定とその重ね合わせ」（草柳 1999: 204）がみられることには注目されたい．社会学者自身の社会（問題）への関与・参加と関わるこの点は，本稿でとりあげるもう二つのアプローチとの対比をするうえでも示唆的である．

ポスト構造主義的アプローチ

次いで本節では，ポスト構造主義的潮流をとりあげる．ポスト構造主義は，意味は指示ではなく差異に基づいているという，ソシュールの構造言

語学に大きな示唆を得て，人文/社会科学に大きな影響を与えてきた思潮である．この流れに位置づけられる，第二波以降のフェミニズム，カルチュラル・スタディーズ，およびポストコロニアリズムは，当初から意図的にというわけでは必ずしもないものの[4]，ほぼ軌を一にして，もしくは交錯しあう形で，主体/アイデンティティの政治性を前面/全面に問題化してきた．

これらは，社会運動への志向をもち，体系的な理論の制度化を避ける傾向があることから一概に説明しがたいが，日常生活でのさまざまな言説を，具体的な文脈において分析・解釈する実践だと特徴づけられよう．さらにあえて要約的にいえば，主体の言語的な構成/脱中心化を論じる諸実践の総称である．これらは，フーコーやデリダらの思想，ポストモダニズム，ポストマルクス主義など，主にヨーロッパで展開された一連の思潮と，英語圏を中心とする言語論的転回とを背景としたものだが，特定の学問領域というよりはある種の振る舞い，姿勢であると考えられよう．そのようなスタンスをとる論者にとっては，一般的な社会的/政治的問題はもちろんのこと，文学，音楽，映画などといったいわゆるサブ・カルチャーも分析対象となる．

こうしたポスト構造主義的な思想に共通項となるのが，アイデンティティ・カテゴリーの暴力的な「本質」化を否定することおよび差異を強調することである．ホールはいう．

> アイデンティティは，言説の外側においてではなく，内側において構築されるものである．まさにそのことによって，われわれはアイデンティティを，特別な言説形成と言説実践の内側で，特別な発話的戦略によって，特別な歴史的・制度的場のなかで生産されるものとして理解する必要がある．さらに，アイデンティティは，権力の特別な様相の運動の内側において生まれるものであり，したがって，同一で，自然に構成された統一体――その伝統的な意味での「アイデンティティ」（つまり，すべてを内包する同じもの，縫い目がなく，内側に差異化のないもの）――の記号であるよりも，むしろ差

異と排除とを示すものの所産である．(Hall 1996＝2001: 13)

つまり，これらはいずれも，いわゆる構造的他者を産出しそれを排除，抑圧するようなかたちで，内的な統一性，同質性を構成，確保するような「本質主義」に抵抗しているのだ．彼/彼女らにとっての敵は，男性中心主義や異性愛主義であり，人種主義や民族絶対主義 (Gilroy 1992＝1995) であり，帝国主義および植民地主義である．

それまでの諸理論において，アイデンティティは，個人の「核」のようなものとして描かれ，アイデンティフィケーションに関しては，もっぱら社会化の過程として，その核を形成，確立する幼年期および青年期に焦点化して論じられてきた．まず前提として「国民」「男/女」などといった特定の集団の「本質」がまず想定され，個人はそれに同化するものとしてとらえられてきたのである．「本質」の想定は，「他者」との差異（化）によって一般化，普遍化，自然化される[5]．こうした考え方に対して異議が唱えられるようになり，アイデンティティ・ポリティクスの議論やその批判，カルチュラル・スタディーズやポストコロニアル・スタディーズ，フェミニズム，およびそれらから派生した批判的教育学の「越境する自己」論（Giroux の所論を参照のこと）など，さまざまな議論が展開されているのが現状だ．これらに共通するのは，アイデンティティを固定的にではなく流動的に捉え，その変化のプロセスを詳らかにしようとする視座である．この視座のもとでは，本質化された完全に透明なアイデンティティと，普遍化された主体という概念は，部分的で，脱中心的で，歴史と場所と言語の特異性にねざした主体という概念にとって替わられる (Giroux 1994＝1995: 184–5).

その際，国籍，人種，ジェンダー/セクシュアリティなど，主体をめぐるあらゆる言説実践が主題化され，普遍化に寄与してきた自然（生物学）的，あるいは文化的な本質主義は論難されることとなった．たとえば，

ジュディス・バトラーの『ジェンダー・トラブル』(1990＝1999)は，そうした運動の急先鋒であるといえよう．

このような，隠蔽されている差異とその権力関係の矛盾への批判および抵抗は，複数のアイデンティティ・カテゴリーの交錯を描きつつ，より先鋭化する．たとえば，フェミニズム運動/思想をみてみよう．第二波以降のフェミニズムにおいては，あたかも全ての女性が経験し共感するかのように想定された「女性の従属性」が，白人/異性愛者/中産階級の女性によって過度に一般化，普遍化されたものであるとして批判された．つまり「普遍的な女性」観には自分たちの経験は含まれていない，という非難が，ブラック・フェミニスト，同性愛者，第三世界の女性たちから出されたのである．それは，人々の多様な経験が「女性」という一枚岩的なカテゴリーの本質化によって隠蔽されることへの懸念とみることができる．かくて，第三世界フェミニズムやウィーメン・オヴ・カラー・フェミニズムの台頭といったかたちで，ポスト構造主義的潮流はますます深化，複雑化することとなった（坂本 2000，竹村 2002，米山 2003 等を参照）．

ところで，ポスト構造主義者が，語る/書くことについて強い自己省察性をもつことにも注目しておく必要があろう．彼/彼女らのアプローチは，「文化」の恣意性・政治性およびその背後の権力関係を問うており，従来の学問およびいわゆる知識人に対しても厳しい批判を展開している．ゆえに，ポスト構造主義の流れを汲む論者たちは，議論する際，自らの「発話の位置」について，つまり自分がどういった立場（性別，出身地，人種，階級など）から語り，その言説がどのような影響を及ぼしうるのかということに対して，きわめて自覚的かつ反省的であるといえる．その意味で，彼/彼女らにおいて「超然とした非関与」はもとより想定されていない．たとえばI. アングは自伝について以下のように述べる．

［……］自伝とは「自己を書く個人的な行為」ではなく，「自己を読む文化的

な行為」であるとすれば，自伝的な言説で問題になるのは，主客たる神聖な「私」がナルシスティックに表示されることではない．問題なのは，自分だけの特定の経験を動的に解釈することによって，すなわち歴史と文化のなかに自己をリフレクティヴに，「現世的な」コンテクストに置くことによって，主格の社会的な位置を叙述的に再構成することである．そうであってみれば，ここで私は自伝を個人的な目的のためではなく，世間に対して「自己」を多かれ少なかれ自覚的に，レトリカルに再構成した表明であると考えたい．(Ang 1994＝1999: 64)

このように，語る者自身の当事者としての自己省察をも含めた人々のアイデンティティ表象の政治化こそが，ポスト構造主義的思潮の「反本質主義」的な戦略となっているのである．

ローティのネオ・プラグマティズム

本論考でリチャード・ローティをなぜとりあげるか，疑問をもたれる向きもあるかもしれない．それは一つには，はじめに述べたとおり，いわゆる「言語論的転回」の広く膾炙されるようになった契機が，彼の編纂した論文集およびその序文(1967)にあるということが挙げられる．まずここに，言語論的転回を牽引した彼自身の「反本質主義」を吟味する必要がある．また，後述する論点の先取りになるが，「反本質主義」「反基礎づけ主義」を特徴とする彼のネオ・プラグマティズムは，一見，先に述べたポスト構造主義的な諸言説に相通ずるようでありながら，ローティはそれらを「文化左翼」と糾弾する．それはなぜなのか．そうした点を検討することで，本稿で論ずるさまざまな「反本質主義」のズレを炙り出せるように思われるからである．

ローティが表明する「反本質主義」は，彼の（ネオ・)プラグマティックな姿勢と密接に関連している．彼の思想に関しては，言語哲学/分析哲学からの政治哲学への転換がしばしば指摘されるが，その志向性は『哲学と自然の鏡』(1979)以前，そもそも『言語論的転回』が編まれた段階で，

すでに準備されつつあったといってよいかもしれない（野家 1993）.

先に述べたように，言語論的転回とは，普遍的，恒久的な「真理」を追究する研究から「言語」に焦点を当てた研究へとシフトすることを意味する．すなわち，従来のプラグマティストの経験主義的な立場とは異なり，この転回を踏まえたローティは「言語」による認識とそれに基づく社会的実践に焦点を当てるのだ．ここで提示されるのが，「会話」を通じた人間形成/創造を意味する「啓発 edification」概念である (Rorty 1979＝1993).「啓発」は，解釈学的活動であるとともに，新しい言葉や語彙，メタファーを獲得/創造するような「詩的」な活動でもあるという．彼は，「啓発的哲学の狙いが，真理の発見というよりも会話の継続にある，という提案」の拡張を図ることとなる (Rorty 1979＝1993: 432).

1980 年代半以降，ローティはいわゆる「解釈学的転回」も経て，その論点を政治的/倫理的なものへと移行させることとなる．柳沼良太 (2002) の整理に従えば，ローティのネオ・プラグマティズムの特徴は，以下のように集約される．すなわち，①「可謬主義 fallibilism」（探究や理解および行動に対して唯一正しい方法はなく，また探究によって真理や有益な知識にどれほど近づいたかを知る方法もないという主張），②「歴史主義 historicism」（諸々の真理や観念および社会実践が特定の歴史的文脈から生じてくるという見方），③「反表象主義 anti-representationalism」（世界を正確に表象しようとする試みに反対し，表象の正確性を決定する方法はないという主張），④「反本質主義 anti-essentialism」（伝統的な哲学が主張する絶対的真理，共通の道徳原理，共通の人間本質の存在を疑い，人間が発見し得る文脈から独立した真実や本質は存在しないとする主張），そして，⑤「反基礎づけ主義 anti-foundationalism」（観念や知識が構成され得る確固とした基盤や土台などは存在しないという考え），の五点であり，殊に後の三つがローティ特有のものである．

かくして，本稿の主題である「反本質主義」が掲げられているわけだ

が，それはローティが，ヨーロッパ系の思想，たとえばデリダの脱構築をめぐる議論を，アメリカのプラグマティズムの伝統に適合的なかたちで解釈を行なったこととも関係している（Critchley et al. 1996＝2002参照）．ローティにおいては，全ては「偶然」のあらわれなのであり，いわゆる「近代的な」自我の実体性，本質性は否定される．自我とは外界との接触によって生じる「信念や欲求の網の目」そのものであって，断じて「それらの信念や欲求をもつ存在」ではない．そしてこの自我と外界を媒介するものこそ，「言語」つまり彼のいうところの「終極の語彙 final vocabulary」なのであり，それはつねに書きかえられることが含意されている (Rorty 1989a＝2000)．この「反本質主義」に基づいて彼のいう自己形成は，他者に対する感受性や想像力を有する「リベラル・アイロニスト」を育む過程であり，ひいては「リベラルな連帯」社会を可能とするものだと主張される．このように特色づけられるローティのネオ・プラグマティズムの思想は，旧来の哲学的伝統に挑戦するものとなった．彼は「政治的リベラリズムの利益のために哲学的中立性を放棄する」と宣言している (Rorty 1989a＝2000: 117)．それは，先にみたポスト構造主義の諸論とある程度相同的なものだと思われる．また，自己形成（ひいてはアイデンティフィケーション）の過程を公共性へとひらき，政治/倫理的な行為ととらえなおす可能性をもっているとも考えられよう．

しかし，実際にローティが提唱するリベラリズムは，保守的だとの一部の批判をうける．確かに，彼の「他者」「差異」の見方はいささか楽観的あるいは単純にすぎるのではないかという疑念はあるだろう．また，とりわけ1990年代以降のローティが展開する文化左翼批判においては，議論に混乱があるようにも見受けられる．よって，ローティと，彼が批判する/されるところの「文化左翼」すなわちカルチュラル・スタディーズやポストコロニアリズムにおけるアイデンティティ・ポリティクスの議論との対立を吟味する必要がある[6]．

たとえば，「個人的なことは政治的なことである」というスローガンに対してのローティの反応は次のようなものである．ローティは「アイロニストは自分の終極の語彙のうちにある私/公の分裂に甘んじるべきである.」「私たちは自己創造と政治を結合させようとするのをやめるべきである．とくに私たちがリベラルであるならば.」と言明する (1989a＝2000: 240)．公/私の分離に関連して，ローティは「自文化中心主義 ethnocentrism」という，誤解を招きかねない表現をあえて用いているが，その含意は，自分がいま受け入れている立場からしかリベラル・アイロニーはなしえない，ということにほかならない（Rorty 1991 他）．彼によれば，自己記述，自己形成はあくまでも「私的」で語用論的（プラグマティック）な活動なのであり，「公」の政治とは統合される必要がないのである[7]．こうしたローティの自己記述に関連した公/私分離の考え方と，たとえば先にみたアングの「自伝」観とは，一部は重なるものの対照的なものといえよう[8]．ローティにおける「公」の政治とは，現実的（プラグマティック）な，いわゆる改良主義的リベラリズムを意味している．また，「『アイデンティティ』と『差異』が政治的熟慮にとって重要な意味をもちうる概念だとは考えない」とまで挑戦的に断言している (Rorty 1999＝2002: 291)．よって，本稿でみたようなポスト構造主義者（ローティのいう「革命的ラディカル左派」や「文化左翼」）の政治とは，同型的でありつつも決して相容れないのである．

おわりに

本稿は，「反本質主義」なるもの/ことばの間にみられる齟齬および違和感を解消すべく，その腑分け作業を目的としていた．もっとも，これらの理論は相互に影響しあっているため，本論考で行なった分類が妥当であるのか，疑問は残る．けれども，さまざまな研究，思想が「反本質主義」という語り方になぜ向かうのか，それぞれの問題構制を精査することは，社会学的方法論の方向性（その軌跡/その可能性）を考える上で重要な作

業なのではないだろうか．今回の試みはあくまでその第一歩である．

ここでは，「反本質主義」を標榜する諸研究を大きく三つに分けて取り上げ，それぞれの特徴を剔出することを試みた．三者の分岐点は，「本質」なるものを，誰が（観察者/当事者が），どのように「本質」ととらえ，それに対してどう振舞うかである．つまり焦点となるのは，分析者・論者が対象とするイシューをいかに設定するか，またそれに対していかに関与するか，という「立場性（ポジショナリティ）」の問題なのである．というのも，言語論的転回を下敷きとする「反本質主義」のもとでは，分析者もまた言語話者である以上，対象の完全な外部に立つことはまずもって想定しえないからである．『哲学と自然の鏡』になぞらえていうならば，「鏡」はけっして客観的な「自然」や物事の「本質」を映すのではなく，それをみる者（たとえば研究者や理論家）それぞれの認識を映し出すのだと明らかになった今，私たちはどのようなスタンスを取ればよいのだろうか．

スペクターやキッセのように，「状況」の実在性，客観性を保留し，クレイム申し立て活動という相互行為に関与せず，あくまで観察者としてその分析に踏みとどまり，その方法論の洗練に努めるか[9]．ポスト構造主義者のように，当事者として対象それ自体にコミットし，また学問という知識の産出過程における権力性にも自覚的に振舞うか．あるいは，ローティのように哲学あるいは理論の現実に対する有効性に見切りをつけ，政治に対するコミットメントを別途に行なうか．研究者自身の立場や対象によって，いずれに立脚点をおくか，また別の位置を模索するのかは，当然委ねられている．

ただし，この立場性に対する感受性をあまりに強くすると，時に発話の制限ともなりうる．先に言及したように，本稿で第二に取り上げたポスト構造主義以降の論者たちは，表象/代弁 representation の観点から，自らの発話の位置にきわめて自覚的である．たとえば，先述のアング (1994＝1999) は自らの個人史を語ることから議論を始めているし，T. モーリス-

鈴木も（アイヌの）アイデンティティを論じるにあたり，「通例」に倣って，自らが他者の集団のために語る資格があるといえるための個人的なバックグラウンドに言及している（モーリス-鈴木 1998）．研究者・知識人が，そのように自らの発言の影響力を鑑みることは，研究者と研究対象との力の非対称性等を考慮している点で重要なことといえる．しかしながら，それが語る「資格」とされているこの潔癖さには一定の留保が必要だろう．というのも，何らかの議論を語る際に，それが自らの経験のみに回収されてしまい，本来の意図とは逆に他者との対話を閉ざしてしまう危険性があると思われるからだ．といって，発言を止めるということも当然すべきでない．

> その意味で，意味づけというのは一つの賭けである．賭けをするのだ．真理に賭けるのではなくて，何かをいうことに賭けるのだ．発言するためにはどこかに位置どりをしなければならない．たとえある場所から離れる位置をとるにせよ，たとえある位置を取り戻したいにせよ，そこから逃れるためには言語に表さなければならない．他には方法はない．それが意味づけのパラドックスである．(Hall 1991: 51＝1999: 80)

いずれにせよ，語る者（とりわけ研究者）にとって，言説実践のもつ立場性，政治性は，それを明示的にするか否かは別としても，もはや無視できないものとなっているのではないか．

ところで，こうした「反本質主義」的パースペクティヴの導入，展開は，従来の社会学とは異なる，新しいアプローチなのだろうか．確かに，本稿にみられたような「反本質主義」から研究者に対しての倫理的要請は，方法論の洗練のうえでも，また研究自体の有効性を考えるうえでも，重要な課題ではあるだろう．だがそれは，これまでの社会学のあり方を脱臼させるような性質のものではない，と私は考える．むしろ，「反本質主義」は，社会唯名論―社会実在論，あるいは，主観主義―客観主義といった，これまでの社会学的な問題構制の徹底のために，来るべくして来た思

考なのではないだろうか.

もっとも当然のことながら，こうした方法論議は，実際の経験的研究のもとで/とともに，つねに検証および修正に晒されるべきであることはいうまでもない．いっそうの検討が求められよう.

注

[1] それにはもちろん，用語を導入する際の「翻訳」の問題もありうるのだが，その点については本稿の論じようとするところを大きく超え出るものなので，ここでは割愛する．ただし，本稿との関わりでいえば，構築主義と構成主義との用語使い分け，constructionism/constructivism の訳語対応などは，それ自体，論者のとるスタンスが強く反映される重要なポイントといえよう．この翻訳と関わる用語法については，たとえば，中河（中河・北澤・土井編 2001: 4–8)，浅野 (2001: 216–8)，上野編 (2001) における赤川学および千田有紀の記述を参照されたい．なお，本稿では基本的に「(社会)構築主義」の語を用いることとする.

[2] ポスト構造主義と類似した呼び名として「ポストモダニズム」というタームもあるが，厳密な意味でその区別を行なうのは難しい．互いの輪郭が融解するほどに両者の影響関係は密接であるし，これら（のいずれか）を掲げる論者たちの自己規定そのものにおいても，両タームの混在あるいは意図的な併存がみられるからである．本稿では，ひとまず広義に「ポスト構造主義」と用いることにする.

[3] その場合はもちろん，本稿で後にとりあげる，ポスト構造主義的な流れでのジェンダー/セクシュアリティ研究やエスニシティ研究も含まれる.

[4] たとえば，1970 年代英国のカルチュラル・スタディーズは，フェミニストと折り合いがよくなかったとされる．当時，スチュアート・ホールらは，その思想的源泉であった（ポスト）マルクス主義のもつ男性中心主義的傾向から，フェミニストから徹底的な批判を受けている（上野・毛利 2000: 128–9).

[5] このような「本質」の想定は，多文化主義においても必ずしも免れえない．米山リサが整理するように，「リベラル多文化主義および企業的多文化主義は，性差，人種，セクシュアリティといった差異から成るカテゴリーを，内的同質性と一貫性をそなえた個別化可能な集合体として扱う」．対して，そうしたカテゴリー自体の再構築を迫る「批判的多文化主義」として，米山は

カルチュラル・スタディーズや第三世界フェミニズム，ウィーメン・オヴ・カラー・フェミニズムを見出している（米山 2003: 37）.

[6] この点に関し，本稿ではあまり多くを述べることはできないが，主に『アメリカ　未完のプロジェクト』(Rorty 1998＝2000) で展開されている議論である．北田 (2001) はこれを，①政治/哲学の位相差の混同，②抽象的・全体的な政治的主張の現実政治に対する無効性，③反本質主義を「本質化」してしまう危険性，の三次元が渾然とした文化左翼批判だとみている．その他，渡辺（1999: 第 4 章・第 5 章）などを参照のこと.

[7] ローティはこの公/私の弁別に基づき，フェミニズムについては，私的なことばの改変可能性にのみ，限定的に評価をしているように見受けられる．それに対して，フレーザーら一部のフェミニストなどから批判が起こっている．もっとも，これは双方の「公/私」解釈の齟齬も関連しているようである（渡辺 1999: 第 4 章）.

[8] ローティは，その自伝「トロツキーと野生の蘭」(Rorty 1999＝2002: 43–74）で，哲学と政治とを結びつけるべきでないと自身が考えるにいたった経緯を記している.

[9] もっとも，彼らおよびその追随者のスタンスは，「厳格派」「コンテクスト派」「脱構築派」などと多岐にわたっている（中河 1999）.

参考文献

Ang, Ien, 1994, "On Not Speaking Chinese: Postmodern Ethnicity and the Politics of Diaspora," *New Formations*, no 24: 1–19. ＝1999，大久保桂子訳「中国語を話さないことについて――ポストモダン・エスニシティとディアスポラの政治学」『思想』903: 61–87.

浅野智彦，2001，『自己への物語論的接近――家族療法から社会学へ』勁草書房.

Burr, Vivien, 1995, *An Introduction to Social Constructionism,* Routledge. ＝1997，田中一彦訳『社会構築主義への招待――言説分析とは何か』川島書店.

Butler, Judith, 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity,* Routledge. ＝1999，竹村和子訳『ジェンダー・トラブル――フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社.

Butler, Judith, 1997, "On Linguistic Vulnerability," *Excitable Speech: A Politics of the Performative,* Routledge: 1–41. ＝1998，竹村和子訳「触発する言葉――パフォーマティヴィティの政治性」『思想』892: 4–45.

Chow, Rey（周蕾）, 1993, *Writing Diaspora: Tactics of Intervention in Contemporary Cultural Studies,* Indiana University Press. ＝1998, 本橋哲也訳『ディアスポラの知識人』青土社.

Critchley, Simon, Jacques Derrida, Ernest Laclau and Richard Rorty; Chantal Mouffe ed., 1996, *Deconstruction and Pragmatism,* Routledge. ＝青木隆嘉訳, 2002,『脱構築とプラグマティズム――来るべき民主主義』法政大学出版局.

Culler, Jonathan, 1997, *Literary Theory: A Very Short Introduction,* Oxford University Press. ＝2003, 荒木映子・富山太佳夫訳『1冊でわかる　文学理論』岩波書店.

Fraser, Nancy, 1998, "Another Pragmatism: Alain Locke, Critical 'Race' Theory, and the Politics of Culture," Morris Dickstein ed., *The Revival of Pragmatism: New Essays on Social Thought, Law, and Culture,* Duke University Press: 157–75. ＝2001, 挽地康彦訳「もうひとつのプラグマティズム――アラン・ロック, 批判的「人種」理論, 文化の政治学」『思想』931: 59–78.

Gilroy, Paul, 1992, "Cultural Studies and Ethnic Absolutism," Lawrence Grossberg, Cary Nelson and Paula Treichler eds., *Cultural Studies,* Routledge: 187-98. ＝1995, 阿部小涼訳「カルチュラル・スタディーズと民族絶対主義」『思想』854: 83–102.

Giroux, Henry, 1992, "Resisting Difference: Cultural Studies and the Discourse of Critical Pedagogy," Lawrence Grossberg, Cary Nelson and Paula Treichler eds., *Cultural Studies,* Routledge: 199–212. ＝1996, 大田直子訳「抵抗する差異――カルチュラル・スタディーズと批判教育学のディスコース」『現代思想』24(7): 129–47.

Giroux, Henry, A., 1994, "The Turn Toward Theory," *Disturbing Pleasures: Learning Popular Culture,* Routledge: 109–26. ＝齋藤直子訳, 1995,「教育理論への転換」『教育学年報』4: 179–202.

Hall, Stuart, 1988, "New Ethnicities," Morley, David and Chen Kuan-Hsing eds., 1996, *Stuart Hall: Critical Dialogue in Cultural Studies,* Routledge: 441–9. ＝1998, 大熊高明訳「ニュー・エスニシティズ」『現代思想』26(4): 80–9.

Hall, Stuart, 1991, "Old and New Ethnicities," Anthony D. King ed., *Culture, Globalization and the World-System: Contemporary Condition for the Representation of Identity,* Macmillan: 41–68. ＝1999, 安藤充訳「新旧のアイデ

ンティティ，新旧のエスニシティ」，山中弘，安藤充，保呂篤彦訳『文化とグローバル化』玉川大学出版部：67-104.

Hall, Stuart, 1996, "Introduction: Who Needs 'Identity'?," Stuart Hall and Paul du Gay eds., *Questions of Cultural Identity,* 1st edition, Sage Publication: 1-17. =2001，宇波彰訳「誰がアイデンティティを必要とするのか？」宇波彰，柿沼敏江，佐復秀樹，林完枝，松畑強訳『カルチュラル・アイデンティティの諸問題（誰がアイデンティティを必要とするのか？）』大村書店：7-35.

浜野研三，2000，「トロツキーと野生の蘭？——ローティのポストモダニスト・ブルジョア・リベラリズムの問題点」『思想』909: 46-70.

橋本努，2003，「リチャード・ローティを脱構築する」『理戦』74: 66-87.

北田暁大，2001，「政治と/の哲学，そして正義——ローティの文化左翼批判を『真剣に受け止め』，ローティを埋葬する」，馬場靖雄編，2001，『反=理論のアクチュアリティー』ナカニシヤ出版：39-76.

北田暁大，2003a，「存在忘却？——『二つの構築主義』をめぐって」『歴史学研究』青木書店，778: 35-40・62.

北田暁大，2003b，「『徴候』としてのリチャード・ローティ」『理戦』74: 88-109.

草柳千早，1999，「構築主義論争を読みかえす——構築主義者はどこに立ち何をみるのか」『文化と社会』1: 197-209.

Miller, Gale and James A. Holstein, 1993, "Social Constructionism and Its Critics: Assessing Recent Challenges," J. A. Holstein and G. Miller eds., *Reconsidering Social Constructionism,* Aldine de Gruyter: 535-48. =2000, 鮎川潤訳「社会構築主義とその批判者たち——最近の挑戦を評価する」平英美・中河伸俊編，『構築主義の社会学——論争と議論のエスノグラフィー』世界思想社：122-45.

宮寺晃夫，2003，「リベラリズムの射程」『理戦』74: 36-53.

モーリス=鈴木，テッサ，1998，大久保桂子訳「グローバルな記憶・ナショナルな記述」『思想』890: 35-56.

長原豊，2000，「本質主義」『現代思想』28(3): 108-11.

中河伸俊，1999，『社会問題の社会学——構築主義アプローチの新展開』世界思想社.

中河伸俊・北澤毅・土井隆義編，2001，『構築主義のスペクトラム——パースペクティヴの現在と可能性』ナカニシヤ出版.

野家啓一，1993，「訳者あとがき」野家啓一監訳・伊藤春樹・須藤訓任・野家伸也・柴田正良訳『哲学と自然の鏡』産業図書（=Rorty, Richard, 1979, *Phi-*

losophy and the Mirror of Nature, Princeton University Press): 473–90.

野家啓一，2003，「アブノーマル・フィロソフィーへの挑戦」『理戦』74: 14–35.

小笠原博毅，1997a，「素描・カルチュラル・スタディーズの増殖について」『現代思想』25(11): 188–201.

小笠原博毅，1997b，「文化と文化を研究することの政治学——ステュアート・ホールの問題設定」『思想』873: 41–66.

Rorty, Richard, 1967, "Introduction: Metaphilosophical Difficulties of Linguistic Philosophy," Richard Rorty ed. 1967, *The Linguistic Turn: Recent Essays in Philosophical Method,* University of Chicago Press [Midway Reprint edition 1988]: 1–39.

Rorty, Richard, 1979, *Philosophy and the Mirror of Nature,* Princeton University Press. =1993，野家啓一監訳・伊藤春樹・須藤訓任・野家伸也・柴田正良訳『哲学と自然の鏡』産業図書.

Rorty, Richard, 1989a, *Contingency, Irony, and Solidarity,* Cambridge University Press. =2000，斉藤純一・山岡龍一・大川正彦訳，『偶然性・アイロニー・連帯——リベラル・ユートピアの可能性』岩波書店.

Rorty, Richard, 1989b, "Education, Socialization, & Individuation," *Liberal Education,* 75(4): 2–9.

Rorty, Richard, 1991, *Objectivity, Relativism, and Truth* (*Philosophical Papers; 1*), Cambridge University Press.

Rorty, Richard, 1998, *Achieving Our Country,* Harvard University Press. =2000，小澤照彦訳『アメリカ　未完のプロジェクト——20世紀アメリカにおける左翼思想』晃洋書房.

Rorty, Richard, 1999, *Philosophy and Social Hope,* Penguin Books. =2002，須藤訓任・渡辺啓真訳『リベラル・ユートピアという希望』岩波書店.

坂本佳鶴恵，2000，「ポストモダン・フェミニズムの戦略とその可能性」『理論と方法』15(1): 89–100.

Spector, Malcolm B. and John I. Kitsuse, 1977, *Constructing Social Problems,* Cummings Publishing Company. =1990，村上直之・中河伸俊・鮎川潤・森俊太訳『社会問題の構築——ラベリング理論をこえて』マルジュ社.

Spivak, Gayatri Chakravorty 1988, "Can the Subaltern Speak?," Cary Nelson and Lawrence Grossberg, eds., *Marxism and the Interpretation of Culture,* University of Illinois Press: 271–313. =1998，上村忠男訳『サバルタンは語ることができるか』みすず書房.

須藤訓任，2000，「対立の転轍——ユートピアン=ローティ」『思想』909: 25–45.

平英美・中河伸俊編，2000，『構築主義の社会学——論争と議論のエスノグラフィー』世界思想社.

竹村和子，2002，『愛について——アイデンティティと欲望の政治学』岩波書店.

上野千鶴子編，2001，『構築主義とは何か』勁草書房.

上野俊哉・毛利嘉孝，2000，『カルチュラル・スタディーズ入門』筑摩書房.

渡辺幹雄，1999，『リチャード・ローティ——ポストモダンの魔術師』春秋社.

Woolger, Steve and Dorothy Pawluch, 1985, "Ontological Gerrymandering: The Anatomy of Social Problem Explanations," *Social Problems* 32(2): 214-27. =2000，平英美訳「オントロジカル・ゲリマンダリング——社会問題をめぐる説明の解剖学」平英美・中河伸俊編，『構築主義の社会学——論争と議論のエスノグラフィー』世界思想社：18-45.

柳沼良太，2001，「ローティ教育論とネオ・プラグマティズム——アイロニックな啓発とリベラルな連帯を中心に」『教育の可能性を読む』情況出版：225-39.

柳沼良太，2002，『プラグマティズムと教育——デューイからローティへ』八千代出版.

米山リサ，2003，『暴力・戦争・リドレス——多文化主義のポリティクス』岩波書店.

吉見俊哉，2000，『思考のフロンティア　カルチュラル・スタディーズ』岩波書店.

吉見俊哉，2003，『カルチュラル・ターン，文化の政治学へ』人文書院.